
数多の世界の、内 2 つ

那珂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

数多の世界の、内2つ

【Nコード】

N3642U

【作者名】

那珂

【あらすじ】

女子大学生の櫻は普通の大学生よりちよつとだけ忙しい生活を楽しく少し風変わりな性格な先輩後輩、友人たちと送っていた。そんなある日のこと、いきなり周りが真っ暗になって美形の神様が現れた！異世界に行け？三つだけ願いを叶えてやる？冷たいんだか情に厚いんだかわからない女子大生が織り成す異世界物語！（知り合いにバレたら消えます） 2011/07/25 題名変更しました。
元・気楽な人たち

その1（前書き）

ゆっくり更新ですが、よろしく願います

その1

はじめまして、私は檜乃櫻ひのさくらといいます。

大学三年生の二十一歳です。

ある大学で委員長とコーラス平部員を兼任してます。

心理学を学んでいます。

好きなものは漫画全般と二次創作！

好きなことは漫画を読むこととネサフすること、二次を書くこと、
絵も時々描くけれど、これがまたへたっぴで。

模写は好きなんです。

え、他はって？

うーん、彼氏はいません。

興味ないっていうか五、六歳くらい歳上が好きなんです。

あ、あとは人間観察も好きだな。

人をからかうのも好き！。

だからあだ名が女帝なんだよね……別にいいけど。

そんなオタクで枯れてる私と先輩後輩友人が織り成す、痛快異世界
コメディ時々恋愛とシリアスをお送りします！

それは、金曜日のこてでした。

この日は部活と委員会の活動が被っているのですが、委員会の方に行ってます。

理解ある部活の人たちで本当に助かります。
まあ、持ちつ持たれつなんですが。

さてさて、20時には活動が終わり、50分までのんびり（ダラダラともいうが）して、帰宅します。

先輩の一人（早瀬さん・男性）は彼女さんと帰るので先にもう帰っています。

2年生の後輩（及川・男）はなんやかんやと忙しくしていて、こっちもさっさと帰ります。

また一人の先輩（真木さん・男性）は学校の近くで一人暮らしなので近い駅がある方とは逆の校門から帰ります。

もう一人の先輩（真辺さん・男性）も、ちょっと歩いたところにある違う路線の駅まで歩いて行かれるのでそっちの方に行きます。

一年生たちは一年生だけでわやわやと帰っていくので自然と、残った男の先輩（矢内さん・男性）と私で途中まで一緒に帰ります。

基本的に私が話題をふって矢内さんが答えてくれたり、また矢内さんが話をしてくれたりとなんだかんだと楽しく帰ります。

え、付き合ってるんじゃないのか？

違いますよお。

よき先輩後輩、仲間です。

去年、すつごく苦楽を共にしたんですよ……今いる一年生以外と引退した人達でね……さておき、駅の改札を抜けたところに部活の人達がいました。

お互いにお疲れ様ーとか言って、先に矢内さんとホームに行きます。だって今は委員会の日ですからー。

そんなこんなで、電車を待っていました。

ホームには向かい側合わせて大体50人くらいでしょうか。

昨今の節電で、外の体育会系の部活は強制的に活動が短くなってま

すからねー、夜も微妙に遅いですし。
後もう、2〜3分で電車が来る頃でしょうか。

突然、真っ暗けっけになりました

「……………」

停電とは違うようでした。

普通の停電だったら、床まで真っ暗になりませんからね。
さらに隣にいた人が見えないわ、いないわ、なあんてありえないから。

こりゃあたし、死んだかなと本気で思っちゃいましたよー。

「死んでないよー。ちょっと別次元に移動しただけだから」

目の前に、この世の人とは思えない別嬪さん……………な男性。
銀色に薄緑の短髪よー。

真っ白なローブを着ちゃって、私に微笑んでいます。

「……………だれ」

「やだなあ、あからさまな格好してるんだから解るでしょ？僕は「カミサマ」……………わかってんじゃん」

「ついでにこの後言われそうなことね」

「な〜んだ？」

「異世界に飛ばすんじゃないの」

「せーかい!」

大袈裟に拍手するな、ウゼエ。

「でも大丈夫！皆いるから。君だけじゃないんだよ？」

はあ？

「あの駅にいたみーんな、異世界に行ってもらっから！」

はあああああっ？！

とりあえず質問しまくった。

どんな世界なのか

魔法とやらはあるのか

魔法の種類と構成方法は

なんの為に

どんな人がいるのか

異世界人を知っているか

そこにいる人達はなんの能力を持っているのか

とか、とか。エトセトラ、エトセトラ。

しかもなんか、3つだけ能力をつけてくれるって。
だからここぞとばかりに言ってやったわ。

「一つ目、次元と時空を何度も越える能力。とりあえず地球とこれから送られる世界でいいから」

「それは二つになるよ？」

「何言ってるの？一言でとは言わなかったじゃん」

「……………そうでした。わかったよ、じゃあ「二つ目はその世界にある魔法全て完璧に強力に簡単に使えるようにして。三つ目は身体能力をその世界にいる女性の平均より2・5倍上げて」……………ズル賢いね、君は」

「ありがとうございます。とても嬉しいわ」

なんかコ○ン君がデフォルメでため息ついてるような、そのぐらい深いため息ついて、深く肩を落とした。

んなもん、知るかいな。

「はあゝなんでこの子担当になっちゃったんだ……………」

「御愁傷様。ねえ、するなら早くして」

「ていうか君、送つても帰る気マンマンじゃないか！」

「だゝから、次元と時空を越える能力って言つたじゃん。言つておくけど、私は全く関係ない世界の為に、自分の世界を捨てられるほどお人好しじゃないよ。好きな本や漫画がまだ続いてるし、それを読むのが私の生き甲斐だしね。でも、危険に侵されてる人達がいるって聞いておきながら放っておけるほど冷酷でもないよ」

ポカンとするカミサマ。

ふふん、参ったか！

「……………キツイって、よく言われない？」

「そうだね。しかもその通りだから何も言い返せないってね。でも為になる、とも言われる。それに自分でも言い過ぎたと思うたら謝るし、ちゃんといいところも褒めるよ。おかげさまでそれなりの友人関係を保たせて貰っているね」

「じゃあ大丈夫だね」

顔が崩れるくらいにだらしない笑顔。

なんか怪しいな。

「では、では！早速行つてきてもらいます！君と同じ異世界渡りの人は君たちにしか見えないけれど額に薄緑の紋様があるから、見分けるのに役立つと思うよ」

了解。

見せてはくれないわけか。

「他の人達はもう先に行ってるからね。各地に」

「一緒の場所にしろよ！」

「頑張つて探して」あ、君と一緒にいた子のところには送ったげ
る」

「当たり前じゃ！」

くっそー

余計な仕事増やしやがって！

探すところから始めなくちゃならんとはっ

「檜乃さん、大丈夫？」

「……………おお」

眩しい光が瞬いて、目を開いた時には矢内さんの心配そうな顔と青空と木々が見えた。

「随分遅かったね」

「まあ色々と話してましたから。……………矢内さん、この世界のこと、お聞きになりました？」

「うん。魔物が人間を喰い殺すのが酷くなってきたらしいね。あと各国で跡目争いも酷いとか」

「私も聞きました。それで、ですけど」
「なに？」

「正直、んなことに50人も必要かと思うんですよ」

「まあ、確かに」

「それに皆ここに来るのは不本意だとも」

「帰れないしね」

「私は異界渡りの力を貰いました」

「……………は？」

「ここと地球のみですが。そこで矢内さん。貴方は帰りたいですか？もう、来たくないですか？カミサマ曰く、あまりにも帰りたいと願うなら折りをみて帰すつもりなんだとか。折りをみてって、いつだよっ」

あ、エアー突っ込みをしてしまった。
こほん

「あの時間帯に帰すことが出来ます。如何ですか？」
「……………檜乃さん」

向かい合って座る私たちの上で鳥がギーギーと鳴く。
くっそ、ここはピチチだろっ。

「檜乃さんはどうするの？」

「ここへ送られた人達を、旅をして探します。そして帰します。あの時間帯に、帰りたくてもう来たくない人、みんな。……………それ以外の人でも一旦は帰そうかな、と。また後日集まってここに来る、とか。大学の講義内容を忘れてしまえますからねー。また来るのは夏休みが始まってからにしようかな」

「……………行き来が出来るなら、また来たいな」

「そうですか」

「俺は男で一人っ子だから、両親を残していけないと思ってる……………でも、こんな非日常なことを体験していたいとも思っているんだ」

目がキラッキラしてますね。うん、やっぱり真辺さんのお友だちなだけあります。

「じゃあ、まあ一旦帰しますね」

「ちよちよちよっ！」

「はい？」

「俺も檜乃さんと一緒に他の人を探すよ！」

「はあ」

「女の子一人じゃ大変だつて。ここだって森なんだか山なんだかわからないけど、盗賊や魔物もいるだろうし、危ないじゃないか」

「大丈夫ですよ。残りの二つは全魔法を強力に使えるってのと、身体能力を倍にしてもらいましたから」

「あのさ、檜乃さん……………RPGでも魔法系は後衛でしょ」

「使ったことないですけど」

「それは何度も聞いたから知ってるけど、基本的に！……………俺の三つは、身体能力を倍、剣の扱いに長けること、魔法が使えること。」

正直に言っ て魔法をどうやって使うのかは知らないから、剣しか使えないってことだけど。なんにせよ、魔法はタイムラグがあるし遠距離のものだから」

んん？

つまり、近接がないとめっちゃめっちゃ弱いってことですかい。

「いいんですか？」

「むしろ頼みたい感じだけどね。それに他の人だって、檜乃さんみたいに考えがいかなかったと思うよ。つつーか、よく思い付いたよね」

「あー……… 異世界トリップ小説を読みまくりましたからね。飛ばされて一番に困るのが『帰れない』ってことでしたんで」

まあ正直、世界が地球しかないなんて随分前から思っ てはいなかった。

パラレルワールドはあると思っ ていた。

ただ、お互いに不可侵なだけで。

本当は、すっごくワクワクしてる。

自分の狭い世界が開けたようで、そしてこれからも開かれていくように。

「真辺は悔しがるよな」

「連れてけっ て言うでしょうね」

「もう行かないっ て人の代わりにならないかねえ」

「おい、お前たち」

その2（前書き）

途中で視点が変わります
読みにくかったら連絡お願いします

その2

「何をしている。ここら一帯は魔獣出現区域で立ち入り禁止だ」

はい、キタコレ。

フラグ立ちましたー。

声が美声だよ。

異世界デフォルト、声が美声なら外面も美形。（今はおそらく、だ
けど）

「えーっと……………」

矢内さんの視線は私の背後にある。
振り向かんぞ。

「迷っちゃったただけなんですはいもう思いっきり迷ってしまってます
いませんすぐに出ていきますからというわけで先輩行きましようす
ぐ行きましよう」

ぐいぐいと矢内さんの腕を掴んで歩く。

矢内さんは戸惑ってるみたいだけど、今は知らん。

私のフラグ回避に付き合ってください。

それにこうすれば

「おい、逆に進んでいるぞ」

っとね、方向を言ってくれろってわけ。

どっちに飛べばいいのかわかりや、こっちのもんだ。

「【移動】！」

町、街と、言葉を思い浮かべて移動魔法を使う。
飛ぶ瞬間、何か男が言っていたが、知るかいな。

二度と会うか。

バイバイ、（おそらく）フラグ男

さて

二人で建物の陰から道を歩く人たちを観察する図って怪しいよね。
必要なことなただけど。

「中世のイギリスって感じですね」

「だね」

「写真は……ん、よしよし。ちゃんとあるね。では、ゆきますっ」

ぼふん

矢内さんは旅の剣士風で、私は旅の魔術師風。
持っていた鞆も外見だけそれっぽく。

歩いていた旅人っぽい人の参考にした。

「じゃ、ギルドに登録しに行きましょう」

この世界には、RPGのごとく、ギルドが存在した。

ただ、職種は多岐にわたる。

剣士は『ハンター』で、魔獣や魔物の討伐が主だ。

魔術師は『ハンター』の他に『薬師』『採取人』がある。

読んで字のごとく、薬を作ったり森に行って貴重な植物を取ってきたり、まあ大体は自分の家で栽培するみたいなんだけど。

『スウィーパー』は掃除人、『運び屋』は街から街へ、国から国へと荷物や人を運ぶ。

『楽士』は式典とかちよつとしたパーティーで楽器を奏でたり歌ったりする。

ぶっちゃけ、私たちの感覚で言うとアルバイト仲介所なわけだ。

ただ、住所不定でも犯罪歴があるうと誰でも登録できるってところは違うかな。

あとランクがある。

トリプルエス、ダブルエス
SSS、SS、S、A、B、CといってGまで。

このランクは危険度や難易度だけじゃなくて提示された金額や条件も含まれる。

というか、これは驚いたんだけどギルドには五歳から登録可能ってこと。

EからGはちょっとしたお小遣いぐらいのランクなんだよねー。

ただし、この世界の成人年齢である18歳にならないとDランク以上は取れないことになっている。

私は21、矢内さんは22なので思いきってAランクの魔獣討伐をやってみることにした。

取りあえずの資金が欲しいんだな。

私たちの持つてるお金を魔法でこの世界の通貨に変えられるけれど、後々面倒になっても困るしね。

「おいおい、お前ら初めてなんだろう？ だったらDから始めなっ

「だいじょーぶ。ゼロからのスタートだからお金なくて」

「だからって」

「危機的状况だから逆に冷静なんで大丈夫！」

当面の生活費が欲しいのよ！

それに死と隣り合わせだしね。

まーなんとかなるっしょ。

それに王国の騎士団数人いるしね。

さー行こう！

んなあああああつ?!

「さっきの無礼な女か」

「うっさい高慢フラグ男。騎士だからって偉そうにすんな」

「檜乃さん、口から漏れてる漏れてる」

むっつり不機嫌なわ私を矢内さんが、同じように不機嫌なフラグ男を別の男性が引き離す。

「えーっとあなた方が依頼主ですか？」

「いや、委託されたから正確には違うがな。君がユーヤ・ヤウチ？私はリーヴェンリツヒ王国第一騎士団副団長クラウレッド・ショーんだ。よろしく」

「よろしくお願いします」

ショーンさんは180cmくらいの、金髪碧眼で超美形さん。

騎士らしく逞しいながらも気品が満ち満ち溢れている。

さっすが、異世界はイケメンが多い。

鑑賞にはうってつけだよ、ホントに。

くはーっゴチソウサマ！

「サクラ・ヒノです。よろしくお願いしますね、ショーンさん」

「クラウで構いませんよ。こちらこそよろしく、サクラ」

笑顔も爽やか！
目に染みるね。

「ほら、君ただだよ自己紹介してないの」

「……………リーヴェンリツヒ王国第一騎士団団長ヴィルホルト・ジエンシート」

「ヴィルと呼んでやってくれ。では、依頼内容の確認しよう」

クラウドが読み上げる中で、私は聞きながらこっそりヴィルを見上げた。

黒髪黒目のイケメソだ。

彫りが深くて、目付きも鋭いし一見ヤクザかと思う。
眉間にシワ寄ってるし。

でも顔立ちも体つきもいってムカつく。
身長だってクラウドより5cmくらい高くて。

ぶっちゃけ、タイプなんだよね。

髪も短髪で爽やかだし。

でもタイプだろーがなんだろーが、なんかムカつく！
なるべく近くに寄らないようにしよう…

と、決心したところで出発となった。

ギルドから依頼受諾の連絡がきて、集合場所として指定した森への入り口まで移動した。

若い男女二人組で、討伐は初めてなんだとか。そこでもうすでに後悔した。

やっぱりランクA以上の討伐依頼を50回以上経験している者、と条件をつければよかった。

もしかしたら、もしかしなくても足手まといになるだろう。

しかし今さら取り消しさせるのも面倒だ。

そもそもこれは、『引き抜き』なのだから。

流浪の剣士や魔術師をスカウトするために自国から依頼された。当たり前ならそれでよし、ハズレなら今度はさっきの条件をつけるだけ。

「おや」

クラウドが声を上げたから、視線をそっちに向けると。

あの二人組が近づいていた

つい先程、先に魔獣のいる辺りを見回っていた時に見つけた二人組は最初、珍妙な格好をしていたはずだ。
だが今は普通の、剣士と魔術師の格好をしている。

「さつきはすいません。俺たちも驚いて」

俺と同じ黒目黒髪の眼鏡をかけた男は、緊張感のない中肉中背の普通な顔立ちの、どこにでもいるような奴だった。
ただ、穏やかそうな雰囲気はクラウドに似ている。

「チッ」

舌打ちをして至極嫌そうな、忌々しいものを見るような女は、いただけない。

焦茶の真っ直ぐな髪は肩より下ぐらい。

身長は眼鏡男より少し低い、といえど170cmくらいか。

顔立ちは、普通にしていれば中の上くらいか。

クラウドに向ける微笑みはとても愛嬌がある。

それにほどよい肉付きで、胸がかなり大き……って！

途中からおかしくないか？！

俺をなぜか一方的に嫌っている女だぞ！
なんなんだ、この女——サクラは。
口も悪いし（俺にだけ）話しかけてもこねえし（俺に対して）、わ
けわからん。
調子狂うな。

クラウとヴィルは幼馴染みの25歳。
意外と若いな。
というか同じ年かよつ。
明らかヴィルはもうちょい年上………のようにはみえなくもないか。
態度はむしろ、私より年下。

なんか拗ねてるし。

まあいつか。

んなことよりも、クラウさんは博識で森にある不思議な植物や、騎士団で起きた面白おかしい話をしてくれる。

こりゃーモテるよな。

女性を侍らせたりするんだろうか。

んーあー、でもしないかな。

むしろ一筋って感じだよ、このタイプは。

一応平等に優しいけど、特別な子は特別扱いしてそう。うつわ、ぜひとその場面を拝みてえ〜っ！

「おい」

一人先に立つて歩いていたヴィルが無表情にこっちを振り返った。つつーか、コイツそうだよ、なんで嫌なのかわかった。

全っ然、表情が変わんないんだ！

さっきの不機嫌だって、空気っていうかオーラでわかったんだよ。表情が見えないから嫌なんだな。

いやー、スツキリ！

これで心置きなく嫌になれるね。

「サクラ、どうした？」

「なんでもないよ、クラウ。……………んで、なんですかジェンシートさん」

「……………そろそろ魔獣の縄張りに入る。各自用意しろ」

へーいへい。

矢内さん、クラウとヴィルは魔法で剣を取り出す。

騎士は騎士でも、第一騎士団は魔法騎士なんだって。

私はその辺にある木の棒を拾った。

クラウドとヴィルが驚いてるけど、まあ仕方ない。

というか、私は気にしない。

なくてもいいもんだからさっ。

でも他人が持つてるとなんとなく持ちなくなっちゃったんだ、だから持つ。

変化させて、馴染みのあるタクトにしてみた。

ん、いーんでない？

「ヒノは後衛、他は前衛の基本型でいくぞ。魔獣をヒノに近づけさせるな」

魔術師はノーガードだからね。

もし教われたら頑張つて避けるよ、私の危機反射。

ガアアアオオオッ

「いくぞ」

その3

これは『当たり前』だったな。

穏やかなな空気をまとっていたユーヤは、機敏に動き的確に魔獣を切っていく。

サクラも詠唱せずに強力な魔法を防御攻撃問わず状況を判断し的確に使っている。

最初に抱いていた印象が後ろめたく感じるほどに、二人の働きは目を見張るものだった。

「それで終わりですね」

ユーヤが最後の一匹を切ってサクラが探査の魔法を使って周囲に魔獣がいないことを確認する。

こいつら本当に今日が初めてとは思えない動きだったな。

サクラのサポートもユーヤとのが一番タイミングがよかったし。

そりゃあ、もともとから知り合いだからだと思っが。

つか、どんな関係だよ？

恋人………にしては淡泊だ。

クラウにはもう懐いている。

って本当になんで俺は嫌われているんだ？！

「おい、ヴィル？」

つと、もう着いたか。

苦笑するクラウとユーヤは、なぜか仕方ないというような雰囲気醸し出している。

クラウはともかくユーヤにまでそう見られているとなると、まるで今の葛藤が如実に出ているようで焦る。

その原因であるサクラは訝しげにしているから、まだいいが。とりあえず、今はさておいてだ。

「素晴らしい働き、感謝する」

「役にたてたようでよかったです」

サクラはユーヤの一步後ろにいて、話す気はないようだ。

何かの感情が浮かびそうになって、会話に集中することにした。

「報酬なんだが、詰所にあるから取りに来てほしい」

「じゃあウチさん、私はあの酒場にいますので」

「いや、追加報酬があるから二人で来てくれ」

「……確かに働きによつては追加報酬があると書いてありましたが、正直あれぐらいで？」

「見くびってもらつては困る。騎士だとして連係プレーだ。特に魔法騎士になるとな」

「放置しておくには勿体ないくらいにね」

「スカウト……引き抜きですか？」

理解が早く、ますます手放すのが惜しい。

「騎士団の入団が、追加報酬ですか」

「そう。試験なしの入団だ」

「なら、お断りします。通常の報酬のみ、俺が取りに行きます」

「なぜだ？」

騎士団は平民が就くことができる最高の職種だ。

しかし国家に仕えることになるから試験は筆記・実技ともに最難関と言われている。

中にはわざわざギルドでの引き抜きを待つくらいの奴だっている。

それを狙っていた訳じゃないのか？

「何故って……俺たちの目的は当面の生活費と旅費のためです。あなた方の依頼を受けたのは、一緒に行く人が騎士団だから、という理由のみですから」

「なぜ旅をする？そもそも君たちはどんな関係かな。恋人でも、兄妹でもない君たちが共に旅に出るなんておかしい」

クラウの『恋人』という言葉に胸が少し痛んだが、とりあえず無視した。

クラウも違うと感じていたようだしな。

「この世界に散らばっている仲間を探さないといけないんです」

「ヤウチさん！」

「別に疚しいことをしているわけじゃないんだし。それにキチンと無理な理由を言わないと諦めないでしょ。団長・副団長が引き抜きにくるぐらいなんだからさ」

「もし、君たちの事情ってやつを話してくれるなら私たちは協力を惜しまないよ」

みすみすこの実力を逃すようなことはできない。

だが、二人はまだ拒む。

ならば、利害関係が一致すればいい。

「私はリーヴェンリツヒ王と従兄弟だ」

利用できる、と提示する。

クラウが苦笑いしていた。

普段は隠していることだからだ。

男も女も、王に取り入りたいがそこまでの地位も権力もない者達が

自分から取り入ろうと近寄ってくるのだ。
お陰さまで十代の頃は軽い人間不信まで陥ったこともある。
だが、原因さえも引つ張り出してまで逃がしたくないのだ。

さて、私たちはここまでしてまで逃がしたくないほどの人材か？
目だけをヤウチさんに向けてみたけれど、ヤウチさんも私をジッと
見ていた。

この場合の判断につきかねる、といったところか。

王様、ね。

これは交渉じゃない、公式な取り引きだ。
普通の大学生に求めんな。

と異世界「いんたー」で言っても仕方ない。

「行きましょう」

悪いようにはしないだろうしね。

詰所といつてもやっぱり騎士がいるところだから、建物は皆だった。
華美の一切を取り払った物々しいものだ。

それでも一歩踏み入れれば、談笑する声が聞こえ、訓練している声
が聞こえてきた。

ふわわ、やっぱり皆さんイイ身体していらっしゃる。

ゴリマッチョじゃなく、細マッチョでもない、程よい筋肉！
くはーっ眼福、眼福っ！

ヤウチさんが意味ありげなニヤニヤ顔してるけど、取り敢えず至福
ものの映像はしかと脳内に焼き付けておかんと！

「ユーヤ、サクラ。こっちだ」

あぁん、まだ見てたいのに………

いや、来てよかった。

取り引きなんかもぶっ飛んじまったよ。
どストライクキターあ！

ヴィルなんてメじゃないね！

「メイトーラ砦総司令官のハイレント・ワズノールだ。よろしく」
「メイトーラ砦副総司令官のメイノーラ・アッシュよ。よろしくね」

ヴィルに大人と色気と色黒を足して逞しさを増加させた超タイプと
男装美女ーっ！

やばい、鼻血出そう。

しかし礼儀として私も自己紹介せねば！

「サクラ・ヒノです／＼／＼」

後ろでヴィルがおっそろしー顔をしてたとか、ヤウチさんから聞くまでちつとも気づくことはなかった。

「異世界……………」

うん、そりゃね。

突拍子もない話だから信じられないよね。

「これは凄いな」

ハイレントさんはPSPをカチャカチャといじっている。

あ、もち自分のです。

当然ゲームもデータスティックは抜いてる。

「信じていただけましたか？」

「ああ。君たちの話には一貫性があるし、何よりこんなカラクリは、今のこの世界では造れないものだ」

「で、あなた達は残りの仲間を探しに行くのよね？仲間にしか見えない額の紋様だけを頼りに」

「まあそうですね……何となくですが、いる方向とか、近いか、遠いかもわかりますから」

「というわけで、さっさと報酬出してください」

「ヒノさん……見も蓋もないって」

王族なんて、フラグフラグ！

ややこしいことに巻き込まれるフラグがバリンバリンするよお。

ただでさえ今だってそうなのに。

「まあまあ、そう邪険にしないでよ。私ね、いいこと思い付いちやった」

男装麗人の悪巧み顔は、とても恐ろしいものでした。

その4

メイノーラさんの悪知……げふんげふん……いわく、ヴィルに王と直接話ができるようにしてもらい、王命をだしてもらっ、ということだった。

「『神から賜りし紋様を額に持ちし者、またこの文字を解し者、王の名において保護する』……とかなんとか」

この世界の文字と私たちの文字はやっぱり当然のごとく違うものだった。

この世界は英語みたいなんだよね、構成とか。

といっても文字自体はアルファベットみたいなじゃなくて、アフリカ系な感じ。

驚かれたさー勿論！

平仮名・片仮名・漢字という三つの文字を駆使して、るってのがね。識字率も99%以上だってことも。

うん、日本語って本来、世界でも言語的に一、二を争う難しさなのよね。

しかし学力は世界の先進国の中では低いんだなこれが。

今はやっと、政府がこれじゃあマズイってんでなんとかしようって始めてるけど……まあこれからの学生達よ、頑張れってとこかな。ただ、勉強は出来る馬鹿にならないようにと願っているよ。つと、話がズレた。

「なるほろー……」

要は、持ちつ持たれつつってことか。

王都がどこにあるのか、どのくらい遠いのか知らないけれど、ヴィ

ルとクラウドはその間ゆつくりと勧誘も出来るし逃がしもさせないってことか。

でも、私は地道に歩いていく、なんてことは思ってたんだけどな。

村から村へ、町から町へ、人が住んでいるところから他の住んでいるところへ移動するときはテレポート魔法を使う気満々なわけで。森やら外の街道はギルドで受けた討伐依頼で出る気はないのよー。

「……………ヒノさん？」

机に突っ伏す私を心配そうに声をかけてくれるヤウチさん。
ううつ、だってだって！

「ミッション系RPGを生で体験したいっ！」

「ミッション……………？」

「アール……………？」

「ああ成る程ね、確かにそうなるか」

普通のRPGはドラオンクレストとかポットモンスオーといった、町から町へ移動は基本的に徒歩で途中途中で出くわすモンスターを倒していくやつ。

ゲーム自体あまりやらないけれど、ミニイベント含め全クリしたことがあるのはキンダムオーツの1と2ぐらいよ！

かくいうミッション系RPGってのは、本拠地があつて、そこで発注されている沢山のミッションをクリアしていくもの。

ストーリーを進めつつ、ストーリーには関係ないミッションでレベル上げしたり、お金稼いだり武器や防具や素材収集できたりする。

モン○ターハ○ターは残念ながらクリアできなかったけど、ゴッ○イーターやファン○シース○ーは全クリできたのよね。

こっちの方が性に合ってるみたいで……………

もし現実に来るのであれば、こっちやってみたかったの。
いわば、叶わぬ夢がまさに現実になろうとしているのよ！

「俺もヴィルも、淒く君たちに興味があるんだよなあ」

「それがフラグなんだあああつ！！」

なんやかんやと言い合っていたら微妙に、宿に飛び込むには宿屋の人も迷惑な時間になってしまった。

結局、私たちは皆に身を寄せるハメに…………

ヤウチさんは、視察にくる人用の客室に泊まり、私はメイノーラさんのお部屋を間借りすることになった。

私も客室でよかったのに、それは私以外の人に猛反対されたよ。

女に飢えた男どもは肉食獣より質が悪いんだから駄目って。

んー確かに皆は町より少し離れたところにあるし、尚且つ花街も申し訳程度にしかないらしい。

そら女なら誰でもよくなるか。

せつかくだし、ガールズトーク（主に一方的な私の質問）に精をだしてみるかね。

「ハイレントさんとメイノーラさんで、いくつですか？」

「ガールズトークって、こういうのだったかしら？…………アレと私は幼なじみよ。といっても年は結構離れているけれど。アレは確か今年で30だったかしらね」

「め、メイノーラさんは…………？」

「22よ」

はい、年の差キターツ！
ぐわぐわっ美味すぎるうっ！

さらにメイノーラさんはこのメイトーラ地方の領主令嬢。
お兄さんがいるからお嬢さんと呼んで…とかはなかったとか。
ただ、お家としては未だに騎士なんてやめて、結婚してほしいんだ
と、悲しそうに笑ってた。

「考えが古いのよね。ここの土地が、国の端だからなんて、理由に
したくはないけどそう思ってしまうことが何度もあったわ」

名前も本当はエリザベスなんだって。

なんか古くさいから嫌って………確かに私も思い出すのはエリザベ
ス女王だし。

でも愛称はリスとかリザで、可愛いと思うよ。

どっちも好きなキャラと同じだから、むしろそっちのイメージが強
いかもしれない。

気高く逞しく美しくて、でも涙も見せることがある女傑ってというイ
メージ。

メイノーラさんも、天然パーマのプラチナブロンドをショートカッ
トに切っているから、美人だけでなく、凛々しさも備えている。
翠の瞳も印象的だ。

このメイトーラ地方を治めた初代にそっくりなんだって。

メイトーラという男性と、メイノーラという女性が始祖。

二人は双子で、魔獣や魔物、賊で溢れていたここら一帯を平定した。
その間にいくつもの英雄的逸話があるらしく、最初は違う名前だっ
たのにいつしかこの地方のことをメイトーラと呼び、メイノーラと
いう、双子を称える神殿を作ったと。

すげー、アッシュ家。

「にしても、貴女は不思議な人ね」

「ほへ？」

「私が今まで出会った女性たちは、みんな恋の話をしたがるのよ。私自身のことを聞いてくれないわ」

「そら、私だとて全く興味ないことはありませんが、どんなことにせよ、その人の人と成り知らなければ話したってツマラナイですから。その人と仲良くなりたければ、ですけど」

「仲良くなりたくなければ？」

「縁も所縁もなければ、人と成りはどうでもいいんで、教訓にして他の人との会話のネタにします」

「あっさりしてるのね」

うつつ、声が出てない笑顔も素敵です！

他にも色んな話をして、一日目の夜は更けていった――。

その5 ヤウチ視点（前書き）

基本的にサクラとヴィル視点なので、他の人の視点の際には表記します

その5 ヤウチ視点

「で、本当についてくるんですか……………」

ヒノさんが心底嫌そうな顔と声をしている。

ヴィルは相変わらず無表情でクラウドは苦笑だ。

二人とも曖昧に誤魔化してくれていて、よかった。

昨日、話したいことがあると二人を部屋に呼んだ。

「どうか、俺達の旅に……………いや、ヒノさんに付き合っしてほしい」

彼女との付き合いは、実はまだ一年にも満たない。

彼女が二年の夏に、真辺に誘われて入った。

それが彼女との付き合いの始まりだ。

それでも、彼女の人と成りを理解している。

出会った時から、彼女はよく笑う人だった。

ミーティングや会議でも、真剣な顔をしていても、ふと笑みがこぼれる。

普段の会話など、始終笑顔だ。

後輩に注意したり叱ったりする時も、最後には仕方ないと困ったように笑う。

そんな彼女がここにきてから、笑わない。

微笑んでいても、それは上っ面だけ。

心から笑っていない。

いや、楽しそうにはしていたけれど、心根から笑顔を作っていないのだ。

不安、なんだと思う。

そもそも50人近くの人間を広い世界から探し出すなんて、途方もない話で、なぜそんなにも一人で背負おうとするのだろうか。

誰のせいでもないのに（むしろカミサマとやらのせいだというのに）、自分しか異世界渡りの能力を持っていないからとか思っているんだろう。

これは、自分では不安を取り除くことは出来ない。

彼女と同じ世界からきたから、俺だって不安だ。

世界のことを聞いたって、実際に体験しているわけではない。

予想は必要だけれども、百の言葉より一の事実は何にも叶わないことを知っている。

だから、この世界の人がいたらいいと思った。

俺達の常識ではなく、今いる世界の常識を知っている人間が。

問題としては、なぜヒノさんがヴィルを苦手としているのか？

「あれは嫌っているのではないか？」

「いや、あれは苦手な態度」

「ヴィルはお世辞にも愛想がいいわけじゃないしね」

「まあヒノさんは男性より女性の方が好きだからね、人間性として」

「そのわりには、お前とは随分気心が知れているようだ？」

「本人が言いたくないことを深く追及しようと思わないから。ヒノさんの本当の深い悩みを知ろうと思っていないからさ。聞いて欲しくもないみたいだし」

「あの子が悩んでいるのは、家族のことだから」

仲間内で家族の話になると決まって彼女は口を閉ざし、ただ聞いているだけになる。

家族構成は知っている。

父が迎えに来てくれる。

両親が迎えにきた。

兄弟はいるかという話題で仲良くはない（というより、趣味が合わない）姉がいると言った。

あと猫が二匹。

それだけだ。

でもね、ヒノさん

君が助けを求めてきたら、いつでも助けに行こうと仲間内で決めているんだよ

その6（前書き）

コメディちつくにしたかったのに、シリアスになってきたので題名を変えようかと思っています

その6

王都まではかなり遠いらしい。

ヴィルとクラウも、各地に点在する王家所有の転移魔法塔を何個も駆使してこのメイトーラ地方まできたとか。

そもそもこのリーヴェンリッヒという国は五つある内一番の大国。力も経済も領土も他を圧倒する。

でも、だからといって他国を隷属にしたりはしない。

どの国もここ数百年は戦争をという話も上がっていないんだそうだ。むしろ今は魔獣や魔物などの対応に互いに協力的なんだと。

人為的な戦いがないのは平和だけど、他の生き物に命を脅かされるのは平和と言えるのだろうか。

まずは一番近い人のもとへ行こうと、周辺の地図を見せてもらった。と、不思議なことが起こった。

「「……………」」

ヤウチさんと顔を見合わせる。

「お前達が言った方向にはこの街になるが……………どうした？」

ヴィルの指先は、私たちが感じている不思議なことを指していた。

「「世界地図つてあります？」」

当然のごとく、地球の大陸図とは違っていて、本当に異世界なんだなって思った。

それはさておき。

ヤウチさんと地図にザッと視線を走らせる。

「この一番ちっちゃいのが一人ですかね」

「多分そうだね。と、考えるとザッと見、やっぱ50人前後か」

「全員、どこかしらの町にいるようです。よかった……………」

「なにになに？二人だけで納得しないでよ」

「あ、すいません。えっとですね」

ヤウチさんが王都までのルートを書き表していく。
なるべく距離が短くなるように。

「私たちの額にある紋様と同じ光が各場所に、薄緑色の光が見えます」

「普通の世界地図にしか見えんがなあ……………」

私たちもびっくらこいてますよ、ハイレントさん。

「まあ、でも王都には行きますよ」

「……………さっきまで嫌がっていたのに」

「王都に行って王様に会うってことは、悪い気がなくなった、だ

け。この先『何があるうとも』一番『都合がいい』国であると実感できましたから」

「ほおう………言ってみ、嬢ちゃん？」

流石に、おおっぴらに都合がいいなんて、気分悪かったかな。

でも、悪いことなんて考えてないのよー。

「一番の大国であるならば、割合から言っても政治的に言ってもこの世界で一番の魔術師がいるはず。それに、この国がどのくらい宗教が浸透してて王様がどのくらい信仰しているかはわかりませんが、神殿ぐらいはあるでしょう？」

地図を見る限り、このコルセルツという世界は一繋がり的大陸で、さらにリーヴェンリツヒ国は大陸の半分くらいの領土だ。

割合的に優秀な魔術師が生まれている確率が高そうでしょ？

政治的なのは、まあ想像の範囲内。

やっぱさ、いくらなんでも見返りを求めない仲良しこよしの政治ってないと思う。

王族間の婚姻だってするだろうし（ってか、してるでしょ）、人員だって政治の道具になる。

いくら隷国なんやらにしていなくたって、人員や技術がある国はそれだけで何らかの時は脅威になる。

だから有り体に言えば、やっぱりどんなに言い繕っても頂点は変わらないのよね。

「国家間の戦争が起こっても、生存の確率が最も高いってことです。後は魔法に関してもトップクラスじゃないかなと。神官さんも一番徳の高い方がいるでしょうし」

「なるほどな。凄いな嬢ちゃん」

「そこら辺の政治の事情が本当なのはよくわからないけれど、ヴ

イル。そこんどこどうなわけ？」

「…………それは言い切れない、とだけ言っておく」

うしっ！

当たってることもあるし、ないこともあるってわけか。

それは王都に行けばわかることだ。

「じゃあ王都に向かいつつ回収していくってことにしましょう」

「そうだね。じゃあもう出る？」

「え、もう行くの？」

「ええ、まあ。講義内容を忘れてしまいますから」

「では15分後にまた集まろう」

ぬ。

やっぱりこのパーティーだとヴィルがリーダーになるのか。
うーん、いい加減に剣なり刀なりの技術取得を考えないと。
後衛って、実は柄じゃないんだよね。

15分後には皆に別れを告げ、砦と町に築かれている魔法壁を抜ける為に歩く。

魔獣や魔物の中には転移魔法で侵入してくるのもいるからなんだって。

そもそもこの魔獣と魔物の違いって何なのかっていうとだな。

簡単に言えば魔獣が四つ足で魔物が二足歩行なんだな。

さらに詳しく言うと、魔獣は基本的に四つ足動物の黒い陰ろうみたいなもので、知性がない。

逆に魔物は魔獣が進化したもので動物を元にした人間？みたいなものの。

知性が少なからずあって、特に最高ランクになると人語も話せるんだってさ。

このくらいになるとギルドの仕事もトリプルエス、ダブルエスランクに相当する。

もちろん、危険度と報酬がね。

さてさて

「ねえヒノさん」

「はい」

「どうして魔術師に会いたいのか、神殿に行きたいのかきいてもいい？」

「いいですよ……夜になら」

「おい」

「「うわっ！！」」

ちよ、あの距離を一瞬にして詰めてきたよ！
5mくらい離れてたのに！

「男と女が夜中に密会か」

「『仲間と』ミーティングですよ。何を変な邪推して気持ち悪い」

「『仲間』というならば、俺たちも聞く必要があるんじゃないか？」

「何抜かすんですか。あなた方は只の『同行者』ですよ。言っておきますけどね、私は別に王様にお目通りしたいなんてこれーっぽっちも思っちゃいませんから」

右手で人差し指と親指をくつつけて見せた。

隙間なんかありやしない。

「最高位の魔術師に会うのも、神殿に行きたいのも、別に王様に融通してもらわなくてもなんとかなるもんです。この世界の魔術師は自由だと聞いてます。そうでしょ？」

「……………そうだな」

「大体こっちは迷惑だっつつてんのに付いてくるんですよね？戦力を逃がしたくないだけで」

「あなた方が私たちを拘束できる権限がないことを、どうぞお忘れなく」

「ここがテト町」

「さっきの町とあまり変わらないね」

「たかだか田舎の隣町ですしね。その辺は私たちの世界とあまり変わらないですね」

いかにもな町。

まんまドラ○エの町を想像してください。

町の中に入っちゃえば、もうどの辺りにいるのかすぐわかる。楽ね。

「では、私は宿を取ってこよう」

「え、いいですよ。見つけたらすぐ次の町へ行きますから」

「サクラ、転移魔法というものは精神力を多大に使うんだよ。いく

ら君の魔力が多くとも無理をする。何せ他人を含め四人も一気に運んだのだから」

「それに一日一回とリセットすれば己の力量もわかりやすいだろう」
「ヒノさん、そうしよう。一日千秋の利は彼らの方が上だし。……」

「それにもしかしたら向こうに帰さなくちゃならないとなると、余計に体力使うと思う」

「んぬぬ………そうですね。そうします」

経験はやっぱり向こうの方が上なんだよね。

仕方ない、経験者の言うことは聞くべきだな。

「では私はこの先にある宿に行っているよ。ヴィル、頼んだ」
「ああ」

ヤウチの言った通り、女を一人異世界渡りをする事となった。
その女は、ヤウチとサクラを見ると大泣きした。

全く知らない土地に一人で、しかも丸腰で放り出されたのだ、仕方
のないことだろう。

しかし女は運の良いことに、ちょうどパン屋の前に『落ちた』。

昨日今日と手伝う代わりに置いてもらっていたようだ。

『帰、れるの……………？』

『帰せます。また来なくなったら、それも出来ます』

『帰りたいっ帰して！こんなトコ、また来るなんて真っ平ごめんだ
わ！！』

『わかりました』

ヒステリックに叫ぶ女にイライラした。

特に最後のセリフには。

ヤウチも片眉をあげていた。

ただサクラは変わらず無表情で。

『じゃあどうぞ』

いつの間に用意したのか、見たこともない魔方陣が描かれた紙を床
に置いてある。

三角やら丸やら、複雑に絡み合った線が円に描かれている。

『……………ヒノさん、これって』

『一度やってみたかったんですー』

こちらも変わらず、みなまで言わずとも通じ合う二人にイライラする。

『手パンは？』

『それはまたいずれ』

「戻りました」

夜、夕食と入浴を済ませたヤウチはサクラの部屋へと向かった。

その間、王都と定期連絡を行った。

特に問題はないらしく、ただ俺の執務机が恐ろしいことになっているようだ。

それはまあ、覚悟していたことだから仕方ない。

「聞いてきました」

まずは目の前の事に集中すべきだな。

「『カミサマ』に聞きたいことがあるんだと」

「神に？」

この世界の神に、名前はない。

神は様々な姿をしており、また沢山いるからだと言われているが、宗教概念となるとまた違ってくる。

曰く、人間が神に名をつけるなどおこがましいにも程がある、というわけだ。

またその神々も託宣の時にも名乗らない。

だからこそこの世界の神々はあやふやで形なく、存在感は恐怖にも

等しい。

かくいう俺やクラウは、どちらかといえば無神論者だ。運命は自ら切り開くものと考えているからだ。

それゆえ、神だのなんだの言われても、いまいちピンとこないものがある。

「人の信念にとにかく言うつもりはありませんよ。ただ俺はありのままを伝えているだけなんで」

「すまない。続けてくれ」

「——最高位の魔術師に会いたいののは、この世界の魔法概念や構成について『人間』側から詳しく聞きたいから。神殿に行きたいのは先ほども言ったように『カミサマ』に会いたいから。またこの世界の神々についての定義も聞きたい。それと広い場所で異世界渡りをしたいから」

「精神力、と言ったとき少し驚いていたな」

「それについて聞かされませんでしたからね」

「ともかくヒノさんは、神に会う確率を高めるために動いています。……が、なんであそこまでストイックになっているのか……。多分これからも度々ああいうことを言うかもしれませんが、よろしく願います」

サクラの代わりに頭を下げるヤウチに、やはり何とも言えないもどかしさを感じた。

その7

一週間と三日。

まー普通に十日。

無事、王都に着きました。

「おー、ここが王都。やっぱり高い建物はお城だけですね」

「人も多いし、道も舗装されてる」

「おいお前ら。よそ見をするな。はぐれるぞ」

とにかく人がゴツチャゴチャといっぱい！

まさにRPGのテンプレのごとくにね！

結局、ここにくるまで会った人たちは皆、返しました。

また来るつもりもないって。

……酷いときには、なじられたりもした。

どうして早く来てくれなかったんだ、って。

不安で、不安で仕方なかったんだよね。

私なんか、すでにこの世界に馴染んでるからね。

服とか、持ち物とか、仕事とか？

知り合いも出来たしさ。

……仕方ないね。

「早く、会いたいなあ……………」

この世界にいる、友達に
慰めてほしい

「早く、会いたいなあ……………」

後ろをそつと振り向けば、遠い目をして何かに焦がれるような表情をしているサクラがいた。

それが無性と不愉快になる。

そんな表情をさせる奴は誰なんだ？

「……………ヒノさんに恋人はいないよ」

いつの間にか立ち止まっていた俺を、すれ違いざまにユーヤが呟い

た。

「これは本当。告白したこともされたこともないし付き合ったこともないって聞いた」

「ほう、よかったなヴィル。サクラの最初が貰えるかもしれん」

「はははっ」「」

こいつら……… 本当は腹黒じゃないか？！

「いじで待ってる」

通されたのは応接室っぽい部屋。

いかにもくさな西洋風の様式で、華美すぎず地味すぎず死角もなく、ここの王様の気質が伺えた。

相応のものを取り揃え、決して突出させるでもなく、けれど隙を窺えさせない質のよさ。

かといって几帳面さはなく、自由な感じ。

この部屋の様相を、王様自らが執り行ったと聞いたから余計に油断ならない人なんだなって思った。

実際、こつそり村や町の人に聞くと、建国一番と称される素晴らしき為政者なんだとか。

へえー、とな。

だが、基本的に私は他人の印象に流されないから、あくまでも参考、というか対策を練るためというか……話わかる人であると、この部屋を見て思いはした。

「あ、来たかな？」

身体能力が普通より上昇しているからか、目なんかよく見えるし、耳も良くなったんだ。

聞きなれた二人の足音と、他に三人。

王様と護衛二人ってどこかな？

「——この者らが、異世界人か」

うわ

ヤバイ

「初めまして、ユーヤ・ヤウチと申します」

「サクラ・ヒノといいます」

「余はアランドラ・ユールム・リーヴェンリツヒだ。言わずもがな、この国の国王である」

この王様、武人か？

っていうくらい、平均より遅い。

流石に騎士であるヴィルよりかは劣るけれど、それにしたって綺麗な体躯だ。

確か29歳だつて聞いたけど………少なくとも二日に一回は鍛練を怠っていないね。

しかし、いくら従兄弟だからとて、ここまで似るかいな。

双子………は言いすぎだけど、兄弟っていつてもいいくらい。四年後のヴィルみたい。

「そんなに見つめて、余に惚れたか？」

「いえ、まったく」

「………」

んあれ？

皆ポカンと——まさか！

「えっと、従兄弟なのに随分と似てるなっと思ってですね。すいませんやっぱり嘘でも肯定したほうがよかったでしょうか。でも私、特にこういう嘘嫌いなんです。ああ、お顔は多分モテるのかなあと

は思いますよ。笑った顔は一般女性なら一撃で落ちますよ。ちなみに今、私はなかったです」

「ヒノさん、ドツボにはまってる。余計なこと言いすぎ」

はわあっ！

フォローのつもりだったんですが！

「——はっはっは！」

によっ！？

笑うところ……？

「いや、なかなか素直だなと思ってな」

「はあ………」

「余は物心つく前からおべっかに囲まれていたからな。心からの言葉をくれるのは、ここにいる者たちと、一握りの人間だけだ」

「貴族たちはいかに地位を得るかで引きずり合いの蹴落とし合いですよね。派閥もあるでしょうし、いかにいさかいを起こさずに腹心の部下を作るか、大変ですよね」

「ああ………まあな」

「ヒノさん」

はっまたやってしまったい！

アランドラ王、苦笑しちゃってるよ。

うわぁ………本気でこの、以外と頭と口が直結しちゃうのを、どうにかしたいよ。

「お主、面白いな………サクラだったか、よくぞこの国に参った」
「え、っと。どういたしまして？です」

そしてアランドラ王はまだお仕事が残っているのだとかで退出。

私たちは王の客人として、暫くお城に滞在することになった。

そして客室に案内される時、ヴィルとクラウとはここでお別れとなった。

物言いたげなヴィルがちょっとだけ気になったけれど、聞かない方が精神的に望ましい、なんて思ってしまったので当たり障りない言葉で別れた。

「どうした、ヴィル？」

「……………」

「ま、聞かずともわかるさ。陛下とサクラのことだろう？」

「サクラは、たいして変わりなかっただろう」

「……………くくつ。ああ、確かにそうだな。サクラは、な。だが、陛下は随分と——サクラをお気に召したようだ」

「興味深い、の範囲だろうがな」

「しかし気に入った者は自分好みに仕立てようとする方だぞ。特に女性はな。今頃、介入されてるんじゃないか？」

「……………かもな」

物怖じしないサクラの物言いに、内心冷や汗をかいていた。

分け隔てなく接するサクラに、アイツはすぐに気に入るだろうと確信していたからだ。

現に、予想以上に気に入ったようで……………焦燥感が果てしない。

「マズいよな」

「そう……………なっ?!」

「惜しかったな、ユーヤ」

背後からの第三者はユーヤだった。

いつの間に。

「客室にはちゃんと案内してもらったよ。その後すぐに転移してきたんだ」

「出来ないではなかったか？」

「だから、練習も兼ねて。けど意外と簡単だな」

「……………転移術はかなり高度なんだがな」

クラウドが苦笑して、俺も頷く。

俺たちでさえ、かなり苦労して習得し、自分ともう一人ぐらいがや
つとだというのに。

異世界人はみなこういうものなのだろうか。

「今はこの際どうでもいいよ。それよりもヒノさんのこと——
随分とアランドラ王はヒノさんを気に入ったようだね」

「そうだな」

「ヒノさんに早く会いたいののは誰かって聞いたんだよ」
「？」

いきなり、なんだ？

余計な焦燥感を煽らないでほしい。

「友人に会いたいんだってさ。つつーか、部活の人」

「友人……」

「それで思い出したんだ。俺が所属しているところは、ヒノさんに
同期はいない。彼女は一人だってことを」

「ユーヤや、他にも人間はいるんだろう？」

「俺は、仲間であっても先輩だから。愚痴を聞いたりもするけど、
それだつて表面上だけのものだし。同期つてさ、頼りない後輩より
も気を使わなくちゃいけない先輩よりも、もっとも気がねなく付き
合える人間の集まりだ」

「……確かにな」

「だからさ、ヒノさんがもうひとつ所属しているところは、そんな
同期がたくさんいるんだ。——早く会いたいていうのもわか
る。だけど、今それがいいのかは別だ」

「なぜだ？」

「友達つてさ、さつき気がねなく接することが出来るって言ったよ
うに、言葉もそうなんだよな。だから——」

ユーヤは一瞬、言葉を詰まらせ、小さく吐いた。

「ヒノさんに表情が戻るかもしれない」

「その何が悪いんだ？」

戻ることは、大変結構なことじゃないか？

「二人はヒノさんの『本当の笑顔』を見たことないからなあ……。きつともつと好きになる。単なる好意じゃなくなるね。友愛・親愛・恋愛に発展するよ」

「そこまで？」

「そこまで。……。なんでかはわからない。それがヒノさんなんだということ。ただ、

皆に笑いかけるヒノさんは、こと恋愛が自分のことになると否定的になって拒絶する」

「だから困るんだ。ヒノさんは一時の感情でこの世界に他人を置いていくようなことはしないけど、自分を傷つけるように力を酷使して皆を連れ帰り、二度とこの世界に足を踏み入れることはしないだ

ろっ」

「……………自分のために、近づくなと言いたいのか？」

この世界は興味深い、いずれ友人も連れてきたいと言ってきたユーヤ。

ここと元の世界とを行き来できるのはサクラだけだとも言っていた。つまり、サクラが二度とこの世界に来ないとなれば、ユーヤも来れないというわけだ。

「自分のためでもあるし、ヒノさん自身のためでもある。——
ヒノさんも、ここにるのが楽しいみたいだからさ」

そんなわけだからヨロシクと（何がヨロシクなんだかわからんが）、ユーヤは去っていった。

「————ウイルス。思い詰めるなよ」
「っ！」

発展しきっていない感情に水を差されたようだった。

「だが、まあサクラのあの様子は普通ではないことはよくわかった。陛下には俺から言っておこう」

「……………頼む」

「なあに、親友の『初めての女性に対する好意』だ。応援してやりたくもなる」

それはニヤリとした企み顔だったが、俺にとっては頼もしいものだ

つ
た。

その8

「サクラ様はこちらのお部屋をお使いくださいます」

「あのう……………」

なんなんだ、これは。

さっきのヤウチさんの部屋よりちょっと広くて、なによりなんですごく離れてるの？

「陛下がサクラ様はこちらの部屋に、と申されましたので。なにによりサクラ様は女性でいらつしゃいますし、陛下のお部屋に近ければ警備も多ございますから」

「ああ、監視するためですか？」

「え？いえ、ですから」

「いろんな意味で大丈夫です。わかってますから。そうですね、物理攻撃より無形の魔法の方が危ないですものね。アランドラ王もかなりの魔術師のようですし、むしろ近い方が殺気を閑知しやすいですよ。でも、休まる時間がなくなるのでは？あー、殺っちゃう気は全くないんですけど」

目をぱっくり開けてビックリしないでください。

そんな驚くことじゃあるまいし。

「……………もう、それで構いません」

やっぱりか。

うーん、魔法が強いつても考えもんだねー。

「では、改めさせていただきます。私^{わたくし}、マリーエルと申します。サク

ラ様付きの侍女でございますわ」

「……………侍女？」

「はい。では早速お召し物をお取り替え致しますわ」

「ちょ、ちょっ！それこそなんで?!」

「陛下のご指示ですから」

「あのですね、アランドラ王の思惑はこの部屋で充分わかりました。だのに、さらに直接的な監視や装備を解かせるなんて、あんまりじゃないですか？」

「そうではなくて」

「本当に王族が関わるとろくなことない。大体ねえ、私たちはギルドで受けた依頼の延長で来てるんですよ。利害が一致しているだけであって、ここまで侮辱される筋合いはないです!」

「あ、あのサクラ様……………」

「———って、アランドラ王に一言一句違えずに伝えてくれませんか？伝えたら、貴女、来ないでください。自分のことは自分できます。いやもういつそのこと、出ましよう。そうだよ、自分のことは自分でやる。そう最初にあの二人に言ったもの。えーと、ヤウチさんはどこにいるかな」

「わっわかりましたから！必ずお伝えしますし、お召し物もかえませんし、もうこちらへ参りませんから！勝手に出ていかれないでくださいませ!」

俊足だよ。

あっちゅー間に出ていつちゃった。

うーむ、いぢめすぎたかしら？

でもね、本当に侮辱だと思っただのよ。

勿論、王族は生まれる前から生死と隣り合わせなのは、歴史嫌いな私でもわかってるさ。

だが残念ながら、バリバリの現代っ子にや、理解できても納得は出来ないわけ。

特に、自由を求める私には……………

「——っま！油断ならない人達ばっかだ、ってわかったことは
良しとしましょう。どうせ向こうに帰る間だけのことだしね。さっ
ゴツツイ結界張ろうっ」

——さっゴツツイ結界張ろうっ」

遠耳の魔法はそこで途切れてしまった。

結界で弾かれてしまったのだろう。

稀代の魔術師にはかなり劣るとはいえ、歴々の王の中では随一を誇

るアランの魔法を。

「くつくつく……………」

さつきから笑いつばなしだなこの笑い上戸（従兄）め。

「この俺おうからの賜り物を裏があるといって、拒否するとは！しかも好意とは全く考えんときた！全く面白い女だ！！」

「しかし陛下。サクラは今、情緒不安定ですやたらに構うのは止めてください」

「なぜだ？……………貴族の権力や美貌に群がる愚かな女は嫌いだ。アレは、サクラは、今までの女とは違う、好ましい女だ。後宮も正妃も召さなかったのは、あのような者を待っていたからだ。欲しいなら、手に入れるまで！」

ああ、駄目だな。

こうなると話しも聞かなくなる。

強情になるんだ。

人間関係の酸いも甘いも髓まで味わったからこそ、本気になっているのがわかる。

クラウも長年の付き合いでわかっているだろうに、不愉快さを隠さない。

「では陛下、一言だけ」

「なんだ？言ってみろ」

止められるものなら止めてみるだけでも言いたげ……………ありありと表情に出しているか。

「陛下——人の心は脆いのですよ」

……クラウが、
こんなに深刻な表情になったのは先頭や討伐で怪我人や死人が出た
とき以外、他はなかった。

いや、たった一度だけ、それら以外で確かあれば――

「お前もサクラには気にかけるな」

「彼女には、好意を抱いていますよ。恋だの愛だのといったものでは
なく、ですがね。ユーヤと『同じように』心配しております」

妙に『同じように』を強調したな。

しかも変に含みを持たせた言い方をしゃがって……何を考えてい
るんだ？

「ふん、頭には入れておこう。……だが、おちおちしていたら誰
ぞに取られてはかなわん。好きにやらせてもらう。サクラに嫌われ
んようにな」

その不適な笑みは、王座に着く時に見せた、不遜な笑みだ。
どんな手を使っても、手中に収める気。

「ヴィル、予定外の遠征で仕事がたんまりだ。少しでも処理しない
と夕食に間に合わない」

俺が何かを言う前に、グイグイと背中を押してくる。
まるでアランと遠ざけるように。

「そうそう、陛下」

もうすぐ廊下、というところで、クラウが振り返った。

その表情は見えない。

「ユーヤがサクラと私たちとの夕食を望んでいます。もしサクラと夕食を取りたいなら、ユーヤと私たちもお呼びくださるよう——ユーヤも、貴方の客人ですからね？」

「何か言いたげだな？ ヴィル」

積み上げられた書類から顔も上げず、右から左へと流れるようにして処理をしていくその姿は、本当に尊敬する。

ちゃんと見てわかってんのか？ ってぐらい早い。

勿論、覚えて理解もしている。

しかも忘れないときたもんだ。

かくいう俺はというと。

クラウのような驚異的な早さはないが、それでもなんとか書類の山をかなり切り崩してはいつてる。

とにかくだ、クラウはそれでいて無駄口を叩いても処理スピードは変わらない。

「ヴィル、手が止まっている」

おっと。

「気になるのも、わからなくもない。なぜそんなにもサクラを守るのか？ だろう」

「ユーヤは、元のサクラを知っているから心配している、というの

「がわかるが……お前がそこまでする理由が判らん」
「確かにな」

穏やかな性格で、しかし時折少年のようなイタズラを、企みを考える。

戦いでは参謀として、時には俺の片腕として前線に出て、敵には冷静に、仲間には熱く。

根っからの『他人から好かれる』タイプ。

だが本人いわく、他人とは一線を常に引いているらしい。

俺はそう思ったことがないと言っと、俺に対してはそうしていないからだと言われたことがある。

まあ、言われてみて、そんな傾向も無きにしもあらずだとは思う。

なんにせよ、そういう奴だからこそ、よくわからない。

まだ会って半月も経ってないからな。

「——救われたからさ」

「は？」

どこか、熱の籠った言葉だ。

「ユーヤに俺の心が救われたからだ。そしてユーヤに心とは何かというものを簡単に教えてもらった。そのユーヤが心配している。だから心配なんだ。……それに」

「なんだ？」

「妹も、生きていたらあの歳かと思うとな」

「……エルーか」

クラウドの妹エルルーカが死んだのは六年前だ。

快活な娘で、そんじょそこの令嬢とは違い、所謂おてんば娘だった。

だが、とある事故で死んでしまったのは………殺されてしまったのは悔やまれた。

「……………いつ、そんな話を？」

「お前が早寝した時、暇でな。外に出たら偶々ユーヤがサクラの部屋から」

「——ほう」

「……………出てきたのは、ユーヤがサクラにノートを返しに行っていたんだ。疚しいことは何もない」

そこで、珍しくクラウが顔を上げた。

ほとほと呆れたような顔だ。

「なんだ、お前。一丁前に嫉妬して。十分サクラのことが好きなんじゃないか」

その9

「それで、余に何を求める？」

何で不機嫌なのかな？

……いや、わかっているさ。

王族専用の食堂に通されて、座る場所で揉めた。

当然、アランドラ王はお誕生日席、否、^{いな}一番の上座で。

そこから向かって左側が第二位。

本来ならば王妃様とか、愛妾さんとかなんだけど、いないって聞いたしご兄弟もいないみたいだから、このメンバーではヴィルが座るべき。

なのにアランドラ王は私を座らせようとした。

なんなんだ、この王は？

最も警戒してる人間を側に置いちや駄目だろう。

魔力だつてヴィルとそう対して変わらないってクラウから聞いたぞ。なら、魔法の戦闘の団長^{プロ}を側に置いておかなくちゃ。

失礼だから内心思うだけにするけど、危機管理が怪しーんでない？

だからキツパリハッキリお断りしたら、呆れた顔されたあ！

私の表情の下はむっカッチンですよ！

さっさと要件を済ませてしまおう。

あ、ちなみに他の席順ね。

ヴィルの向かいにクラウ。

ヴィルの左隣がヤウチさん。

クラウの右隣に私。

地位と年功序列になっています。

「現在の、この世界の宗教の中で信仰が多いものの定義を教えてください。及び最強の魔術師と教会の紹介です」

「ほう、お前たちは新しい宗教でも作るつもりか？」

んなアホな。

「違いますよ。先ほどお話した、」

「冗談だ」

ああそこまでお馬鹿さんじゃなかったか。

私はヤウチさんに説明を任せてお料理を堪能中なんです。だって、アランドラ王とお話したくないもん。なんか不愉快にしかないからさ。

「明日中には全て話をつけよう」

「ありがとうございます」

「しかし、キカイとやらは中々に興味深い。是非ともその技術が欲しいな」

ヤウチさんは、口を閉じてしまった。

私たちがそう、恐れていたことを口にしたからだ。

チラリと私を見てくる。

私は静かに小さく頷いた。

「……………教えることは、出来ません」

「なぜだ？そのキカイとやらを軍事に転用出来れば安全に魔獣や魔物を撃退できるのだぞ」

「そう、『安全に』……………だから、駄目なんです」

「なぜだ？！力のない民が、自ら安全に魔のモノを殺すことができるはずだ」

「ええ、僕らの世界ではすでに機械というものは『安全』に『殺すことが出来ます』——『対人間用』に」

「「「！」「」」」

「機械は便利です。上手く利用すれば生活が楽です。医療にも転用され、沢山の命を救っています。……………今では、ですが」

最初の機械は知らない。

それでも最初は生活のためだったと思う。

けれどもいつしか機械は殺人の為に使われ始めた。人が人を傷つけるために。

もし、この世界に機械をもたらしたら？

今は全ての国の敵が同じだ。

けれどいつか、国家間で戦争になったら？

きっと私達はもたらしたことを後悔するだろう。

「ですから、技術は食べ物に関することだけにしようと思いました」

食べ物、みんな幸せになれる。

あっちの技術を持ち込まない。

ここの技術を持っていかない。

それで皆、幸せになれる。

そもそも私達の存在は、この世界にしてみたらイレギュラーな立場なんだから。

「綺麗事だな」

「そうですね。なにぶん、平和な国で育ったものですから」

基本的に、日本は命の危険がない。

勿論、全くないことは、ない。

ひと度家から出れば車に轢かれてしまうかもしれない。

家にいたって火災の恐れだってある。

けど、深刻に考えることじゃない。

普段からの小さな確認で事足りる。

完璧ではないけれど、ここほど気配に怯えるほどじゃない。

私達は不確定多数から命を狙われていないから。

こと、こういうことに関して、きっと相容れないと思う。

所詮さ、住んでる国どころか世界が違うんだから。

「つまらんな」

つまらなくて結構だわ。

少々気まずく会食は終了した。

アランドラ王が先に出て、やっと一息つけた。

「ヒノさん、送るよ。部屋どこ？」
「こっちです」

ヤウチさんは人一倍疲れたはず。

いつも気が回って優しいのに、なんで彼女が出来ないのかな。
草食系だからか？

「ここか。ちょっと離れてるね」
「食堂には近くていいですよー」

利点はそのくらいだ。

部屋は広けりや死角は多くなるし、掃除も大変。

何せ今は高位な魔術師でないとこの部屋を認識出来ない結界も張ってるから、掃除は自分でやらにやなんのだ。

ま、その方が気楽だからいいんだ。
つと、そうだ。

「ヤウチさん、お話があるんですが」

「ああ俺もある。だから明日にしよう」

「明日……ですか」

「夜遅いし、特に今日は沢山移動して疲れたでしょ。休んだ方がいいよ。まあ正直、俺が休みたいんだけど」

「ヤウチさんがそう言うなら。すいません、気づかなくて」

「いや、悪いね。だからさ、明日話そう。朝ごはん食べながらさ、二人で」

二人で、という言葉にほっとした。

ヴィルとかクラウがいたら、話が進まないだろうから。

「8時ぐらいにしようか。んで、俺の部屋おいでよ」

「いえ、聞かれたくない話なので私の部屋に来てください。魔法で聞かれると面倒ですから。防音バッチリです」

当初、この部屋に来たときから聞かれているような気配がしていた。誰かはわからなかったけど……ここは信用ならない場所だから私色に染めた部屋がいい。

「………わかった。じゃあまた明日。おやすみ」

「おやすみなさい」

「ますます不信感が高まっているなあ」

そう、批難がましい視線を投げつけないで欲しい。
それに関しては俺だって頭を抱えたいくらいだ。

「それにヒノさんの部屋も、随分と厚待遇だ。まさか愛妾や皇妃の部屋じゃないよな？」

「一応賓客の部屋だ。ただ、歴代の愛妾や皇妃の家族に使われていた」

「これは多分不敬罪になるかもだけど……………何考えてんだ？」

ユーヤの言う通り。

アランは何故か突っ走っている。

何を考えているのか、恐らく手元に置き気に入りたいのだろうが……………やればやるほど逆効果の気がしてならない。

いやもうすでに気がする、じゃないか。
警戒されまくっている。

「本当に為政者？……それとも単に女性の機微に疎い？」

「後者だな。陛下が本気で一人の女性を気にするのは初めてだ」

「……………初恋が29歳ってことか」

「まあ25歳もいるし」

「ああ、似た者同士。おや、従兄弟じゃなかったっけ」

「お前ら……………俺になんの恨みがある？」

何故かこの二人が会話すると途中から俺を遠回しに責めるといっつか、いじってくるというか……………

「そりゃ面白———のもあるが」

クラウド、無表情に取り繕っても隣で笑ってる奴がいるから無駄だ。そういう意味も込めて睨んでやると、今度は困った顔で笑った。

「けしかけてるんだよ」

「は？」

と、ここでユーヤに与えられた部屋についた。

サクラの部屋よりかは劣るが、それでも賓客用の部屋だ。応接室・寝室・浴室はついている。

その応接室にそれぞれ防御結界を張った。

特に遠耳の防御には。

「で、だ」

「ヴィル、陛下は逆効果とはいえ外堀を埋め始めているぞ。どうするんだ」

「どうするもこうするも」

どうにかしたいという気持ちはある。

だがアランより好ましいとは思われていないことを自覚していて、
一体何をしろと言った。

「いや、むしろアランドラ王とヴィルは同じくらいだと思っていい」

「しかし陛下は忠告を捨て置くことにしたようだ」

「ならば、やるべきことはただ一つ」

「サクラのフォローにまわるんだ」

つまり、アランドラの魔の手からさりげなく遠ざけるということか。

「その際はただの好意としてすること。何度も言うけどヒノさんは
こと恋愛事は自他ともに認める鈍感で拒絶しただけれど純粋な好意
には凄く敏感だ。とにかくヒノさんの中の好意をあげていかないと」
「なぜ……………ここまでする？」

ユーヤがここまでする理由がわからない。

利益もないことに口出しすること、特に他人の感情に対するのがと
ても不可解に思えたんだ。

「……………ヒノさんは、もっと自分の幸せに貪欲になるべきだ」

「その支えに、ヴィルが一番言いたいと思っているだけさ」

その10

「クーヴァン・ジルエットです」

「ルーヴァン・ジルエットです」

「僕たちが世界一の魔術師だよ」

銀緑色のサラッサラヘアーに、澄んだ湖のような碧眼。

目を見張るほどの完璧なシンメトリーの顔立ち。

一番美しい形、色を全て彼らに与えられていた。

神様の愛し子と言っても過言じゃない。

本当に、本当に美しい双子の男の子たち。

歳は14だから、まだちょっと幼さが残っていて『おいしい』時期だ。

………と、言われているらしい。

ぶっちゃけ、私としては『へー』なわけ。

いや、ホントにキレーな子達なのよ？

でも、世の中やっぱ広いわー世界もいっぱいあるしねー。

それだけだ。

あ、観賞用にはもってこいだなあ。

「おねーさん、その反応は初めてだよ」

「おにーさんも」

「だよねえ、今まで老若男女問わず赤くなられてたでしょうしねえ」

「「そうそう！女の子や女性ならまだしも男にまで照れられるとね」

」

中にはノンケなのにソッチに走っちゃったりしちゃった人とかいそうだなあ。

ま、それくらい綺麗な子達なんですよ。

「おねーさんとおにーさんの名前は？」

「サクラ・ヒノよ」

「ユーヤ・ヤウチ」

「サク姉ねえとユー兄にいね！僕たち二人のこと気に入ったから特別にク
ーとルーって呼んで良いよ！」

「おい、余にはちゃんと呼ばせているのになんだ、特別にとは！」

あ、まだいたんだ。

執務、あるんじゃないのかな。

「えー、だって陛下は僕たちを見て赤くなっただじゃないですかー」

「男が男を見て照れるなんて、当人に見てみたら嫌なもんなんです
ー」

「そりゃあさ、ちょっとからかってやろうとちょっとだけ化粧した
のもありますけど、陛下ほどのお力ならば纏っている魔力を見れば
すぐにわかるものだと思っただけなんですー」

「クー、ルー」

「あつせんせい師匠！」

応接室に入ってきたのは凄いラフな格好をしたヴィルだった。
無表情に少しだけ呆れた感じを表に出してる。
ん、師匠？

「師匠は恩人で体術の師匠なんだ」

「まだ魔力の制御が上手く出来なくて魔法が使えない時に拐われそ
うになったことがあるんだ」

「その時巡回中でたまたま通りかかった師匠に助けられて」

「魔法に頼りきりにならないようにって体術を覚えてくれたんだあ」
「だから師匠はいいんだよ」

そつ、今は笑っているから良いんだろうけど………
当時は怖かっただろうな。

悪意か好奇の目かはわからないけれど、狂気を孕んだ瞳は恐ろしい。
それが年端もいかない子供に向けられたこと。

私たちの世界と何ら変わらない悲しいこと。

子供は守られなければならない。

精神的にも肉体的にも。

心理学を本格的に学び始めてから特にそう思うようになった。

だからありのままを受け入れるようにしている。

ただ、生理的に受け付けられない人っているもんだから、それはそれとしてなるべく関わらないでいられるようにしてるけど。

うん、まあ今はどうでもいい。

「陛下はさつさとお仕事したほうがいいんじゃないですか」

「ああ、宰相さんが困った顔してますね」

もう朝の九時半で、普通ならお仕事は始まっている時間だ。

王様だけど、王は王なりにお仕事はあるでしょうしね。

宰相も大変だなあ。

「くっ！………サクラ、昼食は共に取るぞ」

「お断りします」

え、なんでそんなみんなして（ヤウチさん以外）驚いてるんですか。
宰相さんなんか、口がパツカリ空いちやって、まー。

「お昼はヤウチさんと城下街で食べ歩きするんで」

「それ、僕たちも一緒に行ってもいい？美味しいとこ連れてってあげるよ！」

「あ、いいね。一緒に行こう！」

双子とキヤイキヤイ戯れる。

うーん、地球の日本の14歳と違ってスレてないから、付き合いやすいなあ。

しかし、なんでヤウチさんはヴィルとアランドラ王に睨まれているんだろう……？

はっ、まさか！

「ジェンシートさん、アランドラ王。遊びに行けるのが羨ましいからと言ってヤウチさんを恨んじゃ駄目ですよ！私が行きたいってお願いしたんですからねっ」

だから恨むなら私にしないで！

全くもう。

いい大人が子供みたいに拗ねちゃって。

デカイ図体で、んなことしてもただキモチワルイだけだったの！…

……とは決して口に出すまい。

「サクラ………」

む、なんかちっさい子に言い聞かせる雰囲気がプンプンするなあ。ヴィルが困ったような顔で頭をかくと、なんかそんな感じがしちゃうんだよね。

これがじつは、好きなポーズだったりする。

別にヴィル限定ではなく（ここ重要！）

「ユーヤもそうだが、一応お前たちは王家の客人だ。外に出るのに王の許可が必要だし、護衛も必要だ」

「でも――」

「でも、じゃない。ここでは普通のことだ。知っていて最終的に受け入れたのは君たちだ」

勝手にくつついてきたのに？

色々提示してきて脅してみたいなことをしてきたのはそっちなのに？
だけど、結局は受け入れてしまったこっちの責任なんだろうな。

「わかりました。次からは改めます」

「すまない」

制約があつて、息苦しいね。

社会にでたらこんな感じなのかな。

「今回は俺がついていこう」

「お仕事あるんじゃないの？」

「今日は非番だから、心配することはない」

「もうそれで決定！僕たち早くお話したいっつ」

「じゃあ私の借りてる部屋でお話しよう？」

クーが私を、ルーがヤウチさんの腕を引っ張って駄々をこねる。

うっん、可愛いなあ。

「ああ、そうだアランドラ王」

廊下で、アランドラ王は右に、私たちは左にわかれ歩き出したところで、大事なことを忘れてた。

「二人を紹介してくださってありがとうございます」

きつちり六十度、最上礼をする。

なんだかんだあっても、スムーズに面会できたのは王のおかげ。

苦手な人でも、嫌いな人でもしてもらったことにはちゃんとお礼しなさい、と母に教え込まれた。

「俺からも、我が儘を聞いてくださってありがとうございます」

ヤウチさんもピッチリお辞儀。

腕のルーが若干邪魔そうだけど。

「——最高神官長は明日の午後、面通りできる」

「わかりました。ありがとうございます」

お？

顔がちよつと赤い？

風邪かな？

まーいい大人なんだし、大丈夫でしょ。

「じゃあ、行こっか」

「魔法の概念？」

うーん、ちよつと抽象的だったかな。

「魔法の基礎ってどんなのかしらってこと」

「陛下より強い魔力なんでしょ？」

「師匠より強い魔力なんでしょ？」

「なんで今さら？」

あ、そっか。

異世界から来たこと説明してなかったね。

何回も説明しているから簡単に確実に伝えられる。

「ふーん」

なんか興味なさげ？

14歳って、大体中二でしょ？

てつきりファンタジー（私からしたらこの世界がそうなんだけど）
大好き、とか言わないかな。

いや、まあ中二の子達が皆、夢見がちとは思わんけどね。

「んーっと、サク姉は普段、魔法を使うときどんな感じに使ってるの？」

「想像しながら思うままに対象へ向ける感じかな」

「やっぱりサク姉、僕たちよりずっと凄いや」

双子が言うには、一般人が魔法を使う際には術式と呪文が必要になる。

まず想像ありき、なんだがそれは高度な術師でないとかなり難しい。通常、術式も呪文も魔法を発動させるための補助の役割になるのだが、これがまた複雑で。

どちらも長い長い。

術式は見たこともないミミズがのたくったような線が、大体ルーズリーフ3分の1ぐらい。

これで一番簡単な着火の術式なんだから、ビックリ。

呪文も同じように『火魂かこんの欠片よ、ここへ我にその恩恵を与えたまえ、我はその恩恵に頭を垂れる者なり』って、おいおい。

長いわくどいわ。

クーとルーはこの呪文を思い浮かべつつ、効果も想像しながら魔法を使う。

私としては、双子のほうが凄いけど。

後は武器等にあらかじめ術式を描いたり嵌め込んだり纏わせたりするのだけれど、それだと種類しか使えないし、威力も少し弱くなるんだって。

「サク姉達は想像するだけでしょ？」

「それって凄いことなんだよ？」

そうかなあ、二人の方が凄いと思うけど。

「だって結局は呪文の力に頼っているじゃないか」

………そういう考えになるのかあ。

その11（前書き）

大変お待たせした割りに、短くてすみません……………（汗）

その11

「そういえば、クーとルーの両親はどうしたの？」

「っていうか何してる人たちなのかな？」

「子供が凄い魔術師なんだもん、同じように魔術師なのかなって思うけど。」

「「ん」今は息子夫婦と暮らしているはずだよ」

「……………クーとルーも息子だろ？」

「「元師匠だよ」」

「いや、そんな。」

天真爛漫な無垢の笑顔向けられても、理解不能だつて。

「僕たちは、元々は稀代最高の魔術師クルーヴァン・ジルトニクスという一人の人間だったんだ」

「あんまりにも凄い魔力でさー千年くらい生きてきたんだけど、流石に飽きちゃって」

「魂と魔力を半分にしてみたんだけど、若返り過ぎちゃって赤ん坊になつて」

「しかも魔方阵が転生の陣を参考にしたから、僕たちはクルーヴァンが前世になつちゃって」

えーとつまり、二人の前世が共通してその稀代最高の魔術師クルーヴァン・ジルトニクスなわけ。

んで、あくまでも前世は前世であるから、新しい性格が構築されてるってこと。

「これで、よかったの？」

「強いて言うなら、名前をもうちよつとひねってくれたらよかったのになあ、ってことぐらいかな」

前世が同じで、でも今の自分はその人と違う人間であると自覚している。

それって、気が変にならないかな。

そりゃね、私たちの世界にだって前世の記憶があるって人はいるさ。でもこの二人は誰かから生まれたわけでもない、無理矢理魂を分けた、いわゆる異質。

飽きたからじゃなくて、孤独だったから、自分の本質を誰も知らなくなつた故の結果だ。

「サク姉、そんな顔しないでよ」

う、なんか変な顔してたかな。

「そりゃさ、最初の頃はわけわかんなかったけどさ」

「自業自得だしさ、それに悪いことばかりじゃないし」

「ただもう一つ挙げるなら、好きな子が被るってことかなー」

「ああ………同じ魂だもんな」

そりゃ確かに弊害だわさね。

「うん、やっぱり」

ちょ、人の顔見てニヤニヤしないでほしいんだけど。

「サク姉に眉間のシワは似合わないね」

……ババアとでも言いたいのか。

「これが【テペロ】ね。ソースは甘めがオススメだよ」
「美味しそうね」

赤い粉がかかっている肉らしき者は割り箸的な物の半分くらいを包んでいくつもお皿に乗っていて、山になっている。

「肉は【ブウブ】っていう鳥類なんだ。脂身たっぷりなんだけど、思うほどクドくないよ」

名前は豚っぽいのに鳥なんだ……思わず吹き出しそうになったけど、こっちのひとにしてみたら私たちの世界だっておかしいよね、
と思ひ直す。

クーとルーと私で、お昼時の露店をあっち行ったりこっち行ったり。その後ろをやウチさんとヴィルがはぐれないでついてきている。
二人は落ち着いて話し込んでいて、ちょっと自分が恥ずかしくなる。

テンション高い双子と一緒に頑張ってウロウロしてる21つて、どんなよ。

まあ楽しいから気にしないようにしよう、うん。

さて。

絶世の美形の双子が、なぜ市井に出ていられるか、気になりませんか？

ちゃんとか対策してるんですよ、この子たち。

白いローブを頭からかぶってて、しかも魔法がかかっている。

気配を薄くさせるのと、顔の認識いわゆるが見ている端からおぼろ気になる所謂、視角認識を曖昧にする魔法、さらにローブの外や天気に合わせて常に着用者の快適温度に合わせる魔法。

凄いなあと思うのと同時に、ここまでしなくちゃ外に出られないのは大変だな、って思う。

本来なら足に絡まるような長いローブなんか脱ぎ捨てて駆け回りたんだろうになあ。

「サク姉、今度はこれ食べてみて！」

うーん、今は暗いこと考えても仕方ないよね。

二人とも楽しそうだし、なら私に出来ることは一緒に楽しむことだ。今までかなり殺伐だったからね。

「少し表情が柔らかくなってきた」

小さく安堵のため息をつくユーヤを見下ろす。

俺は純粹にそれを喜ぶことが出来ない。

なぜなら俺やクラウ、アランでさえサクラの緊張をほぐすことはできなかつたのに、クーとルーはそれをやってみせた。

ユーヤが言う、魅力的な（そこまで言っていない）笑顔の欠片は弟子たちのみに向けられている。

欲しい、と強く思う。

せめて視線だけでも、警戒していない目元を向けてくれないかと。

「……………全く、重症だ」

これほどに、乞い願う感情を持つのは初めてだった。

その12(前書き)

だんだん短くなっていきます……
すいません(汗)

その12

大国の王が、こんなにもわかりやすく不機嫌だとわかってもいいことなのだろうか。

今日の夕食にはクーとルーも同席している。

私とヤウチさんがひとつ席を下座にずれて空いたそこに双子が座る形になった。

ちなみにクーが便宜上、兄となっている。

なんでも一番最初に目を開けたからとかなんとか……

でもこんな細部までそっくりな双子、どっちが誰、なんてわかるんかと思ったけれど、常にクーは右手にルーは左手の手首にリボンをつけていたそう。

知恵がつき始めてからは取り換えっこをしてたらしい。

そら、やるよな。

面白そうなもの。

「「サク姉、どうしたの？」」

おっと、いつの間にか思考が逸れていたわ。

「ちょっとね、色々と考え事」

「「例えば？」」

食事中に不機嫌な顔されるとご飯が不味くなるよなあ、とかは言えず。

「私はこんなに美味しいご飯食べてるけど、友達はどうしてるのかなあとか、自分にそっくりな姉妹がいたら何しようかななんて」「ヒノさんの友達だったら、なんとかやっていそうだけど」「ええまあ奴等ならなんとかやっていっていると思いますよ。冷静でシビアな人間がいますから」「彼氏とかあー?」

ゴフツ

双子の思いがけない発言にアランとヴィルがむせる。
食べ物が詰まるのも同時って、本当に双子とか思えてくる。
精神的に双子なのかな。
かなり珍しいけど。

「「サク姉?」」

「ああ、ごめんごめん。えっと冷静でシビアな奴ね」

聞きたくもない、というか聞かれたくない言葉で意識が明後日に行つちやつたよ。

「女友達だよ。一応、婚約中になるのかな。学校卒業したら結婚するかもーとか言ってたし」

「するかもーって……あまり乗り気じゃないんだ?」

「んー……その子自身は幼なじみの延長線上だから、恋人としての愛情はあるんだかないんだかとか言ってたまして……」

「「政略結婚?」」

「ううん。ただ、彼氏の方が友達を大好きー、愛してるーって感じなのよね。それに友達も悪い気はしないし、結婚したら楽かなーとか言ってたから、両方円満合意の結婚よ」

「「……………サク姉?」」

「いいんじゃない。向こうが好きだ好きだ言ってるんだから。幸せになると思うよ。友人の一人として、とても嬉しいな。――で、なに？」

「言葉の割には、哀しそうだね」

クラウドに言われて気づいた。

しまった、顔に出しちゃったか。

嘆いても仕方ないことで、ううう、突っ込まれるかな。

「ところでアランドラ王、一応明日は教会のトップの方にお会いできるんですね。何か会う際のお作法とがありますか？」

こうなりや話題変更だ。

それに聞きたいことでもあったしね！

「んんっ、ああ、そうだな……儀式でない限り決まったことはない。サクラやユーヤの思う礼を尽くせば良い」

普通に目上の人に対する対応でやればいいのか。

「緊張するか？」

「え？」

今、初めてアランドラ王の年相応の姿を見た。（いや、まだ三回目なんだけど）

「緊張は、あまり」

「そうか」

ちょっと、なんか子供っぽい人なのかなあと思っていて、でもそうだよ。

腐つても（失礼）大国のトップなんだもん、子供っぽいままなんて
いられないはず。

それに見てきたじゃない。

村や町の人たちの、王に対する称賛を。

個々の月収ごとに税金が違い、小さな村まで行き届いた道路の調整
を。

国民のことを思って、してほしかったことをしてくれた、って。

彼は歴代の中でも最も賢王だと言える、と。

もう少し認識を改めないかね。

「明日は余も同席する」

「お手数おかけします」

ヤウチさんのお礼と一緒に頭を下げる。

呼んだ張本人がいないとね、相手に失礼なものね。

しかし、うーん。

やっぱり大事おおいでになってるよなあ。静かに過あやまごしたかったのにー。
これからファンタジーっぽくなんないかなあー。

その13 クラウ視点

今日サクラとユーヤには、夕食時に会った。

二人はクーとルーにまわりつかれていた。

成長が少々遅れ気味の双子は他の同年代に比べ小柄で、また彼ら自身が悪戯好きとなれば手癖の悪い子猿ぐらいにしか思っていないかったのだが……

まわりつかれているサクラの表情に、少し変化が訪れていた。

常に張っていた警戒心が和らぎ、口元に小さく笑みが出来ている。

普段は気まぐれにフラツとやってきては、ヴィルにじゃれついたり書類を滅茶苦茶にしたり筆記用具を隠すならまだしも妙な魔法をかけて暫く使えなくなったりといったデスクワークの邪魔だけでなく、訓練場や鍛練室のあちこちにしかけられたトラップで何度使えずメニユーが滞ったことか……

そこまで思い出して一気に気分が悪くなった。

いきなり空気が変わったことに気づいたサクラとユーヤは、特に追及することなく放置をしてくれた。

ありがたいことだ。

ひとつため息をついて溜飲を下げる。

今さら過ぎ去ったことを言うつもりはない。

あの子猿達も、もう少し（精神的に）成長すれば大人しくなるだろう。

まあ今回のことで子猿から傍迷惑な人間に格上げはしたがな。

その13

クラウド視点（後書き）

クラウドさんは策士の腹黒さんによつかと

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3642u/>

数多の世界の、内2つ

2011年10月9日10時55分発行